



近代性と聖・俗の統攝(統攝)

Modernity and the Encompassment of Sacred and Secular

目次

- 1. 近代性の概念と定義
- 2. 近代化・近代性・モダニズムの区分
- 3. 脱近代性理論と批判
- 4. ウェーバーと合理性中心の近代性
- 5. 統攝理論聖と俗の関係
- 6. 多重的近代性論
- 7. 代替的近代性論
- 8. 自生的近代性と東学思想
- 9. 大巡思想と近代性
- 10. 現代の危機と近代性の再照明
- 11. 結論:東西の融合と統攝
- 12. 参考文献および示唆点

近代性の概念と定義

近代性(Modernity)とは、人類を暗闇の桎梏から脱出させ理性の力を取り戻させた特性として、東西洋を通じて文明の象徴として崇拝されてきた概念である。

科学技術を世界認識の土台とし、それに資本と国家が結合して自然と人間を対象化し効率的に管理する生活の様態を近代性と規定することができる。

近代性は長い人類史の試行錯誤を通じて人類が発見した普遍的価値であり、これにより「近代性」は世界が共通して志向するものとなった。

近代化・近代性・モダニズムの区分

近代化(modernisation)

産業革命およびその影響に関連する一連の技術的・経済的・政治的発展を意味。例: 産業革命、都市化、市場経済の拡大、国民国家の形成

近代性(modernity)

近代化の結果として現れた社会的条件と経験の方式

例: 理性と合理性の重視、個人主義、世俗化、伝統と権威の弱化

モダニズム(modernism)

近代性の特徴を芸術・文学など文化領域で表現した思潮。例:

伝統と形式の解体、実験的芸術技法、自我表現の重視

脱近代性理論と批判

脱近代性(post-modernism)理論は近代性に対する批判理論として、手綱を離れた欲望の結果として人類が前代未聞の絶滅の危機に直面したという認識から出発する。

脱近代論者たちの主要な批判

- デカルト式合理性の還元主義的性格の批判
- 理性中心主義と同一者としての近代性問題
- 他者を排除する近代的思惟方式
- 絶対的真理と普遍性への懐疑

代替的提案

- 他者を受容する相互関係的合理性
- 生成的、過程的、解体的思惟方式
- 真理の相対性と多元性の認定
- ミクロな権力関係および言説分析

主な思想家

ニーチェ (1844-1900)

フーコー (1926-1984)

デリダ (1930-2004)

ウェーバーと合理性中心の近代性

マックス・ウェーバー(Max Weber)は近代性の核心を「全社会の合理化」に圧縮して説明した。

ウェーバーが定義した近代性の3大要素:

- 合理的資本主義(Rational Capitalism)
- 合理的な法-行政体系(Rational Legal-Administrative System)
- 合理的な社会分化(Rational Social Differentiation)

ウェーバーの『宗教社会学論叢』で提示された合理性は近代性の核心概念として位置付けられた。

脱近代論者たちの合理性批判:

- デカルト的理性中心主義の限界の指摘
- 近代性の合理性が他者を排除する同一者中心の世界観を形成。合理性の偏向性
- が現代の危機の原因であると主張

統攝理論聖と俗の関係

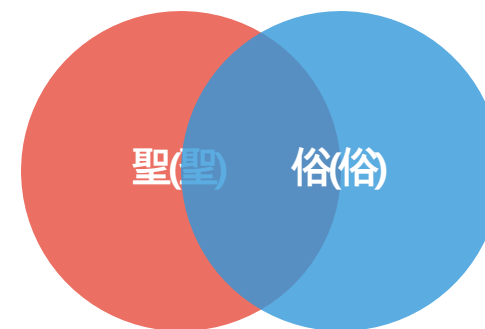
統攝(統攝)は中心が外部を排除せず包含しつつ統制する宗教社会学的近代性モデルである。

統攝1:聖(聖)が俗(俗)を統攝-軸の時代以降

統攝2:俗(俗)が聖(聖)を統攝-近代性の意味

聖(聖)と俗(俗)の再配置を通じた神性(神性)の強化である統攝関係は、人類普遍の現象

。統攝理論は宗教化の裏面の合理化を説明してくれるため、東西洋近代性の多様な様相を理解するのに有用である。



統攝1:聖(聖)が俗(俗)を包含し統制

統攝2:俗(俗)が聖(聖)を包含し統制

近代性は統攝1から統攝2への転換

多重近代性論

多重近代性(multiple modernity)は近代性を西欧のみの現象ではなく、多様な文明と文化に現れる現象として理解する理論である。

-
- 1998年学術誌『Daedalus』「early modernities」特集号で初めて登場
- 代表学者:アイゼンシュタット(S. N. Eisenstadt)、ウィトロック(B. Witterroff)、アナソン(J. P. Amazon)。西欧中心主義的近代性概念に対する批判的代案

多重近代性の核心主張

今日、近代性は地球近代性(global modernity)として理解すべきであり、これは複数の文明の相互交流による重層的近代性(Multilayered Modernities)である。

- 原型近代性(proto modernity) – 西欧的近代性以前
- 植民-被植民近代性(colonizing-colonized modernity) – 西欧的近代性以降。地球
- 近代性(global modernity) – 現在の重層近代性

7 代替的近代性論

代替的近代性論は西欧的近代性に対する批判的観点から出発し、多様な文化と歴史的脈絡の中で発現する近代性の代替的形態を模索する。

文化理論的アプローチ

西欧中心主義から脱却した多様な文化的文脈における近代性の理解

文芸・政治批評

多様な芸術と政治的文脈に現れる代替的近代性の表現の研究

人類学的観点

非西欧社会の自生的近代化過程と独特な近代性発現方式の探究

グローバル化と地域性

グローバル化の中で地域的特殊性と結合した新たな近代性の形態の提示

区分	多重的近代性論	代替的近代性論
焦点	西欧と異なる文明圏で発現した多様な近代性の類型分析	西欧的近代性への代案模索と実践的変化の可能性
主要研究者	アイゼンシュタット、ウィットロック、アルナソン	アパデュライ (Appadurai)、ギルロイ (Gilroy)、オング (Ong)

自生的近代性と東学思想

自生的近代性(Autogeneous Modernity)とは西欧の近代性を受容するのではなく、我々の伝統の中で近代性を発見し発展させる概念である

。

自生的近代性の特徴

- 西欧と東洋の近代性が圧縮的に共存
- 近代性と脱近代性を同時に包含
- 東洋伝統思想の内在性に基づく

東学思想は朝鮮の社会変化の中に現れた自生的近代性の代表的事例として、「宇宙の原理が身体に備わっているゆえに民心が即ち天心」という東洋の相関的思惟に基づいている。

東学思想と西欧近代性の比較

区分	西欧近代性	東学の自生的近代性
主体	個人の理性	民衆の経験
基盤	啓蒙主義、理性	内在的靈性
目標	個人の自由	輔国安民(保國安民)
方法論	合理的科学	聖俗の統攝

9 大巡思想と近代性

大巡思想は120数年前にすでに近代性に内在した危機を予見し、東西洋思想の融合を通じた代案的近代性を提示した。

大巡思想の近代性理解

西洋の近代性が現代危機の震源となった時、大巡思想が提示した解冤相生(解冤相生)の近代性概念は近代性再定立の新たな解法として注目される。

当時理解されなかった理由

- 西洋の物質文明で華麗に包装された近代性に隠される
- 東西洋思想を総合した大巡思想の深みを理解しがたかった
- 中心的近代化言説の支配的位置

現代的再照明の文脈

- 西洋近代性の限界に対する認識の拡散。
- 新科学から東洋学への関心の転換。西欧
- 統合的世界観の必要性の増大
- 近代性の再定立のための代案の模索

「大巡思想が提示した東西洋が融合された解冤相生の近代性概念は、近代性概念の再定立問題に対する新たな解法として注目される。」

現代の危機と近代性の再照明

近代性が作り出した現代社会の危機が人類全体の生存を脅かす水準に到達

近代性の逆説的結果:

- 環境危機と生態系破壊
- 人間疎外と共同体崩壊
- 科学技術の発展と不確実性の増加
- 物質的豊かさと精神的空虚さの共存

近代性の再解釈の試み:

省察的近代性(ウルリッヒ・

ベック)

近代性自体が自らを省察し危険を認識し、リスク社会に対応する新たな方向性を提示

液体近代性(ジグムント・バウマ

ン)

固定され堅固であった近代が、流動的で不安定な「液体」状態に変化した現代社会の診断

11 結晶東西の融合と統攝

自生的近代性と西欧的近代性の統攝を通じた人類共存の新たなパラダイム

東洋の自生的近代性

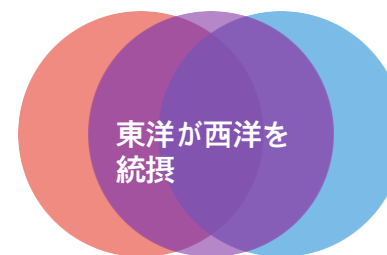
- ◆ 東学思想と大巡思想に込められた内在的近
- ◆ 代性。聖(聖)と俗(俗)の調和を通じた人間理
- ◆ 解

宇宙の原理が身体に具備されているという相関的
思惟

- ◆ 科学的合理性と理性中心の世界観。
- ◆ 近代化を通じた物質的豊かさの達成
- ◆ 人間中心的思惟を通じた自然支配

統攝を通じた新たな近代性

- ◆ 聖(聖)と俗(俗)の境界越えを通じた代案的近代性。解
- ◆ 冤相生(解冤相生)の原理を通じた人類共存方向の提
- ◆ 東西思想の統合的理解を通じた未来社会の志向点



省察と統合を通じた
自生的近代性の再発見

12 参考文献および示唆点

主要参考文献

金相準、『孟子の汗、聖王の血:重層近代と東アジア儒教文明』、ソウル:アカネット、2011。李正雨、『世界哲学史3:近代性のカルトグラフィー』、ソウル:キル、2021。

李正雨、『世界哲学史4:脱近代思惟の地平』、ソウル:キル、2024。ウルリッヒ・ベック、『危険社会:新たな近代(性)に向けて』、ソウル:セムルギョル、1997。ジグムント・バウマン、『液体近代』、ソウル:カン、2009。

マックス・ウェーバー、『プロテスタント倫理と資本主義の精神』、ソウル:キル、2010。アイゼンシュタット、『多重的近代性の探究比較文明的観点』、坡州:ナナム、2009。

研究の示唆点

- ◆ 自生的近代性-韓国と東アジア独自の近代性の理解が可能
- ◆ 統長モデル-西欧合理性モデルの限界を補完する代案的理論の提示
- ◆ 東学と大巡思想-韓国の近代性形成において固有の思想的土台を準備
- ◆ 聖と俗の関係の再照明-現代社会の危機克服のための新たな観点の提示

韓国学研究の発展方向

聖と俗の統長観点から韓国の歴史と思想を再解釈することにより、現代韓国社会が直面する問題に対する新たな解決策を模索し、東西思想の統合的理解を通じてグローバル時代の普遍的価値を創出することができる。